琉球方言の否定を表す接辞の異形態について

沢　木　幹　栄

キーワード：琉球方言　否定　接辞　方言文法全国地図　da

On the suffix meaning negation in Ryuukyuu dialect

1．はじめに

琉球方言で否定の接辞は古典文法の「ぬ」に対応する形であり，首里方言では「書かない」はkakaNとなる。ところが，琉球方言の一部では後接する接辞によってはdaとなる。（例　多良間方言のikadatam「行かなかった」）

本稿では，da（解釈によってはada）がどのような地理的分布を持っているか，そこからどのような通時的変化が推定されるかについて述べる。主な資料としては『方言文法全国地図』を用い，適宜筆者の調査結果や福嶋による徳之島方言の動詞活用の詳細な調査結果（岡村06に所収）等も考察の材料とする。

2．資料について

『方言文法全国地図』は国立国語研究所（以下国研と略称）から第1集から第6集までが刊行され，言語地図集として完結している。この言語地図集のユニークな点は全資料が電子化され，公開されていることである。琉球地域の調査地点は以下の40である。地点番号（6桁の数字で位置を定義したもの）と地名を併記する。（　）内に所在する島を示した。琉球地域で40という地点数は決して多くはないが，全体の分布を概観するうえでは必要最少限度を満たしていると言える。

以下，『方言文法全国地図』の琉球地域での調査地点を琉球弧上に並ぶ順に北から南西端に列挙する。必ずしも地点番号順ではない。

033080　喜界町小野津（喜界島）
022896　笠利町佐仁（奄美大島）
024801　名瀬市小湊（奄美大島）
024731　宇検村湯湾（奄美大島）
024688　瀬戸内町芝（加計呂間島）
027597　伊仙町伊仙（徳之島）
027651　徳之島町亀徳（徳之島）

029466　和泊町手々知奈（沖永良部島）
121389　与論町麦屋東区（与論島）
以上　奄美方言域

115792　仲里村字比嘉　（久米島）
116962　座間味村字座間味（座間味島）
122148　伊是名村字諸見（伊是名島）
123238　国頭村字佐手（沖縄本島）
123352　国頭村字安田（沖縄本島）
123199　今帰仁村字仲宗根（沖縄本島）
124226　東村字平良（沖縄本島）
124149　名護市字名護（沖縄本島）
125104　恩納村字恩納（沖縄本島）
125059　読谷村字長浜（沖縄本島）
125127　金武町字金武（沖縄本島）
126116　勝連町字平敷屋（沖縄本島）
126122　北中城町字熱田（沖縄本島）
126068　那覇市首里赤平町（沖縄本島）
126192　知念村字知名（沖縄本島）
127026　糸満市字糸満（沖縄本島）
127105　知念村字久高（久高島）
以上沖縄方言域

214152　平良市字大神（大神島）
215017　伊良部町字伊良部（伊良部島）
215121　平良市字下里（宮古島）
215151　下地町字上地（宮古島）
206807　多良間村字仲筋（多良間島）
以上宮古方言域

207625　石垣市字川平（石垣島）
207696　石垣市字石垣（石垣島）
207698　石垣市字宮良（石垣島）
208603　竹富町字竹富（竹富島）
208660　竹富町字黒島（黒島）
209560　竹富町字波照間（波照間島）
207469　竹富町字西表（西表島）
208516　竹富町字古見（西表島）
207220　与那国町字与那国（与那国島）

以上八重山方言域

以下で地点を示すときは地点番号を用い，必要に応じて島名などを加えて理解に供することにする。

また，関係する質問項目は以下の通りである。質問番号（調査票での質問番号。調査票は第1集（国研89）に収録されている）と質問内容を記した。ただし，否定の言い切りに関しては，007「書かない」で代表させることにする。

007　書かない
198　行かないと
185　行かなければ
186　行くか行かないか
183　行かないなら
196　行かないで
197　行かなくて
198　行かなかった
199　行きはしなかった
180　行かなくても
203　無かった

最初の「書かない」だけが第2集（国研91）で，ほかはすべて第4集（国研99）に記載されている。調査者から報告されたそのままを，それぞれに付属した資料一覧で見ることができる。ただし，今回は国立国語研究所の方言関係のサイト（http://www2.kokken.go.jp/hogen/dp/dp-index.html）からデータをダウンロードし，データベースソフトで必要なデータだけを取り出した。

ここでは，007，197，198，203を特に詳しく見ることにしよう。

表記はそれぞれの資料で使われているものをそのまま使用している。『方言文法全国地図』や筆者の調査結果は音声表記だが，国研63は音韻表記，岡村08は音韻表記的な簡略表記であるといった具合で，いろいろなレベルのものがあることに注意していただきたい。

3．否定の言い切り「書かない」（質問番号007）

それでは，一番単純な否定の言い切りから見ることにしよう。

全体に kakaN（または kakaŋ）が主流である。これは古典文法のカカヌに対応するものと考えて問題がない。kak までを語幹と考えると，aN が否定を表す接辞になる。

kakaN 以外の語形は以下の通り。

kakam　024688　瀬戸内町芝
kakai　027651　徳之島町亀徳

kakannu，kaka　121389　与論島
kaganuN　207220
kakanu　207625，207696，207698
kakanun　208516
ka:nu　208603

kaganuN 以下は八重山方言域であり，石垣島を中心とした八重山諸島では kakanu が使われていることがわかる。nu は古代日本語の「ぬ」に直接対応するものだろうか。ここではその可能性と，一度 kakaN になったものに新たに間投助詞のようなものがついて kakanu になった可能性の両方があるという立場を取りたい。

本土方言の語末のヌに対応する音は該当する語例が少なく，確定的なことが言えない。平山67によれば，着物（キヌ）は石垣で kīN，祖納（西表島）で kinu となっており，kakanu が本土方言のカカヌに直接対応する可能性が排除できない。

121389（与論島）の kakannu も八重山と同様に考えられる。

4．否定過去「行かなかった」（質問番号198）

首里方言では「行かなかった」は国研63では，'ikaNtaN となっている。国研63で「起きた」が'ukitaN となることから，「行かない」の'ikaN に過去の助動詞 taN がついた形と考えられるが，そんなに単純なことではない。『方言文法全国地図』の質問番号198に対する回答語形は大部分が ikaNtaN 類だが，それ以外を列挙すると以下のようになる。

027597　?ikadati
027651　?ikarati
029466　?ikadana ?ataN
115792　?ikanaataN
125197　?ikaNnataN
214152　ikata:tam
215017　ikattan
215121　ikatta
206807　ikadataN
207469　ihaNda:
208516　paranasita

最初の２地点は徳之島だが，027651の亀徳は柴田77でも d → r の変化が確認できる地点であり，027597の語形から027651のそれへと変化したと考えられる。

027597では「書いた」（質問番号041）は katsī となっている。別地点（天城町浅間）ではあるが，徳之島方言の詳細な記述である岡村06によれば過去を表す形は２形あり，「起きる」を例にとると，'wI:tI と'wI:taN である。027597の「書いた」の語形は語幹と過去を表す接

辞が融合したものであることがわかる。

同じく岡村06によれば，「起きなかった」も２形あって，'wI:da:tI と'wI:dataN である。そうすると da（:）が否定を表す接辞で，tI または taN が過去を表す接辞ということになる。なお，岡村氏の内省によれば tI と taN のうち，どちらかが多く使われるということは特にないということである。

027597と027651に戻るが，岡村06の浅間方言と同様に考えれば，da あるいは ra が否定の接辞，ti が過去を表す接辞ということになる。

029466の ikadana ʔataN は115792の ikanaataN と徳之島の語形との中間形のようにも見える。「行かなくて」（質問番号197）は029466では ikadana となっている。ʔataN は首里方言や徳之島浅間方言から類推して「あった」に当たる形であろう。したがって，直訳すれば「行かなくてあった」のような形ということになる。

125197は029466の類と考えられるが，ikaN に ataN が接続し渡り音の n が間に挟まったと解釈することもできる。

214252から206807までは宮古方言である。分かりやすい例として206807（多良間島）をまず見ることにする。

206807は「書いた」が kaki: となっていて『方言文法全国地図』の資料からは「行かなかった」の語形の分析がしにくいが，筆者の1972〜73年の調査（伊良部島佐和田）によれば，「書いた」は kafutam（あるいは kafutal）であり，過去を表す接辞は tam であると考えられる。崎山62に「北風と太陽」の多良間方言訳を音声記号で表記したものがあるが，そこでは「脱がなかった」に相当する部分が pa ɖ dʒadataṃ となっている（「脱ぐ」の多良間方言は琉球大学68によれば paddzï:）。

以上のことからすると206807の回答が ikadataN となっているのは腑に落ちない。宮古方言は一部を除いて成節的な m と n の区別が厳格に行われており（すくなくともこの調査の行われた時期までは），ikadatam と記録すべきだったと思われる。ほかの宮古方言域の回答語形も同様である。

次に214252だが，この地点は有声子音が無声子音として発音されるという特徴がある。したがって，ikata:tam の ta:は宮古の他の地点で da として現れているものに相当すると考えてもよい。

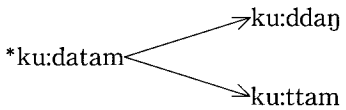
215017と215121は上に述べたことから，ikattam とすべきものだと考えられる。この語形の成り立ちについては，筆者の伊良部島佐和田および佐良浜の調査の結果が示唆的である。

佐和田でも「行かなかった」は ikattam であるが，これはもともと多良間と同じく ikadatam だったが da が促音化したためにこのようになったと考えられる。以下にその根拠を記す。

佐和田では促音の後の子音は無声である。これは促音のもとになった音節の子音が有声でも無声でも同じである。たとえば，「鯨」は futtsa で「注文する（あつらえる）」も attsail となる。

ところが，伊良部島佐良浜は促音の直後の子音は有声無声の区別がある。「口は」は futtʃa，「鯨」は fudda，「来て」は tti，「脱げ」は haddi となる（「脱ぐ」は hadzï:）。この区別は促音化する音節の子音が有声かどうかで決まるようである。

佐良浜では「来なかった」は ku:ddaŋ となる（佐良浜ではほとんどの場合，他の宮古方言の成節的な m は ŋ で現れる）。佐和田では ku:ttam となるところである。この二つの語形が同じ語形に由来するとしたら，

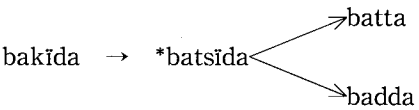


のような変化を想定すると佐良浜の語形も佐和田のそれも無理なく説明できる。

問題は，data → tta のような変化が宮古方言で認められるかだが，筆者の知る限りほかの語例でこのような音連続がないので，この変化は確認できていない。ただ，宮古方言は琉球方言のなかでも促音化の激しいことで知られる（崎山63）ので，このような変化が起きる可能性は十分ある。

崎山63に記載されていない促音化の例を挙げよう。「来て」は佐良浜では tti，佐和田では ttʃi となる。この二つの方言では他の宮古方言の kï（これ自体本土方言の ki に対応）に tsï が対応する。kï → tsï の変化の結果，kïti → tsïti になり，そこから tti，ttʃi が生じた。

もう一つの例を挙げると，「腋の下」は多良間島などでは bakïda（琉球大学68）だが，佐和田では batta，佐良浜では badda となる。これも以下の経路で生じた語形だと考えられる。



data → tta の音韻変化があったと考えれば，多良間島の回答語形から，ku:datam を祖形と考えるのが一番無理がないということになる。

以上により，215151を除く宮古方言域の語形はすべて ikadatam か，そこから変化した形だと考えることができる。そしてこの形は徳之島浅間で見ることができたものとよく似ている。

215151の回答語形は ikantan で宮古方言域でありながら沖縄方言域と同じ形になっている。おそらく沖縄方言の影響であろう。

最後の二つは八重山方言域であるが，こちらには否定の接辞としての da はないようである。

207469は質問番号46の「行った」が içida となることから，過去を表す接辞が da（:）であると考えられる。「行かない」にそのまま過去を表す接辞が付いて，「行かないた」に当たる形となっている。

208516も sïta が過去を表す接辞なので，207469と同工である。

5．「無かった」（質問番号203）

「行かなかった」とよく似ているのが，存在の有無を問題にしている「無かった」である。「無かった」（質問番号203）は首里（126068）では ne:NtaN である。沖縄方言域では「無い」は ne:N と ne:raN の両形があり，「無かった」も ne:NtaN か ne:raNtaN が現れる。taN は前述のように過去を表す接辞なので，本土方言に直訳すれば「無いた」のような形になる。

琉球方言全域で「無い」の否定過去は動詞に否定の接辞をつけた「〜しない」の形と同じ活用をする。否定の接辞 da がある可能性のある回答語形は以下の通りである。

027597 ne:dati
027651 ne:rati
023466 na:dana?ata
121388 ne:dantan
214152 ne:tatam
215017 ni:ttam
215121 nja:ttan
215151 njattam
206807 ne:datam
207469 mja:nda:
207698 ne:na:da:

徳之島の2地点については，「行かなかった」と同じ説明ができる。023466も同様で，形としては「無くてあった」に当たる形と解釈できる。

121388の ne:dantan は d と r の混同によって ne:rantan から生まれた形と考えられる。

宮古方言域は「無い」は ne:n，nja:n，ni:n である（質問番号204）が，これらに datam がついて「無かった」ができたと考えられる。厳密に言えば，ne:n などの語末の n は否定の接辞であり，異形態として da という形をとるということになる。

祖形としての datam から実際の回答語形を生じるプロセスについての説明は「行かなかった」と同じである。なお，215151は「行かなかった」では沖縄方言域と同じ語形だったが，この項目では他の宮古方言域の地点と歩調をあわせている。

207469で mja:nda: という語形が現れるが，これは「無い」ではなく「見えない」に対応する mja:n であり，da: は過去を表す接辞であろう。

6．行かなくて（質問番号197）

「行かなくて」は「子供が仕事に行かなくて困った」の「行かなくて」の部分の回答である。da と関係がありそうなのは以下の通り。

022896 ?ik'jadzī，?ik'jadana
024801 ?ikarana
024688 ?ikja : dana
027651 ikaratatu
029466 ikadana
121389 ?ikadzī，pajadzī
214152 ikatauririt u

215017　ikada
215121　ikadanaʃi
215151　ikadanaʃi

024801はd→rの変化の結果であり，022896，024688は先行するiの影響でka→kjaの変化が起こったと考えると，奄美方言域ではikadanaおよびその変種が多い。027651のtatuは徳之島浅間のttuと関係がある。例を挙げると浅間では「数えてみたら」がjudattuとなる（岡村06，二千文の番号では1861）。浅間のttuは動詞の過去形に接続する。

奄美方言域ではdzīも出現する。これはdaと関係があるかもしれない。

214152以下は宮古方言域である。214152は前述のように有声子音が無声子音になるので，ikatauririturは もともとikadauririduであったと考えることができる。duは琉球方言に特徴的な係助詞である。意味は「行かないでいて」だと思われる。

215121と215151は同じ形だが，ikadanaに手段を表す助詞ʃiがついたものだろうか。

7．daの由来と語史

以上，否定の接辞daについて『方言文法全国地図』をもとに琉球方言での分布を概観した。「行かないなら」などでもdaは観察されるが，仮定の意味が積み重なっているために分析が困難であった。次の機会に詳述することにしたいが，daはここで取り上げなかった項目でも奄美と宮古で出現する。

簡単にまとめれば，daは「行かなかった」の否定の接辞として琉球文化圏の中心地であった沖縄南部をはさむように奄美徳之島と宮古に存在する。また，「行かなくて」のときはdanaが奄美で広く見られ，宮古にも存在が確認できる。このような地理的分布はABA分布として知られ，両端のA同士直接の交流がなければAはBより古いと考えられる。

奄美と宮古は琉球文化圏では辺境であり，徳之島は奄美のなかでさらに周辺に位置している。そのことから，daは否定の接辞の他の異形態よりも古いであろう。では，daはどこから来たのか，本土方言で音韻対応する語形はないのかなどと疑問が湧いてくる。

現在のところ，daの由来は全く分からない。本土方言で直接対応するものも見つからない。その意味では「行かないで」で奄美大島佐仁と与論島にikadzīがあるのが気になる。これはイカズと関係があるのだろうか。

また，「行かなかった」の意味で沖縄方言域で主流的なikaNtaNは決して古い語形ではないだろう。おそらく，ikana ataNから変化したものではないだろうか。

8．おわりに

この稿をまとめるにあたって安田尚道氏に奈良朝日本語の否定の助動詞についてご教示いただいた。記して感謝申し上げる。当初，daをなんとかして本土方言に結びつけようとしていたが，むしろ別の方向で考えるべきかと思うようになった。

考察半ばであるが，否定の接辞にこのような現象があることはまだ知られていないようで

あり，『方言文法全国地図』の資料をこのように活用することとあわせて報告の価値ありと信じて稿を草した。

参考文献

岡村隆博・沢木幹栄・中島由美・福嶋秩子・菊池聡　(2006)『徳之島方言二千文辞典』
国立国語研究所　(1963)『沖縄語辞典』　大蔵省印刷局
国立国語研究所　(1989)『方言文法全国地図第1集』
国立国語研究所　(1991)『方言文法全国地図第2集』
国立国語研究所　(1999)『方言文法全国地図第4集』
崎山理　(1962)「琉球・多良間島，水納島方言の音韻」　『音声の研究』10
崎山理　(1963)「琉球・宮古方言比較音韻論」　『国語学』54
柴田武・学生有志　(1977)『奄美徳之島のことば―分布から歴史へ』　秋山書店
柴田武　(1984)『奄美大島のことば―分布から歴史へ』　秋山書店
平山輝男　(1967)『琉球先島方言の総合的研究』　明治書院
琉球大学沖縄文化研究所編　(1968)『宮古諸島学術調査研究報告　言語・文化編』

(2008年11月10日受理，11月18日掲載承認)